

## 巻頭言

# 潜行する農村の活力

独立行政法人農業工学研究所理事長

佐藤 寛



「村がさびれた、若者がいない」という声は五十代前の人の耳には実感を伴わないのではないだろうか。言い替えると「農村の過疎化と高齢化」となるが、これは昭和三十五年を基準にして指標化されている。この年は戦後の第一次高度経済成長のピークに当たり、並行して工業化の担い手が農村から都市へ大移動した時期である。経済性のみを指標とすれば、土地生産額の低い農業が主要産業である農村部は、人口が疎のベクトルになるのは当然であった。また、市町村合併によって三千以上あった自治体が一千程度に減るのも目前である。六市町の県もできそうである。いよいよ「村」が消えていく。以前は農村を「農業的土地利用が優先する地域」と説明した。囲いを広げることで行政上の定義から村がなくなり、見えにくい形で「村」が都市に内包され生き続けることになる。

なんだか夢のない話になりそうだが、これらの状況はすべてをならした時の表現であり、また高度経済成長期前の視点によっている。現実的には過分の経済成長を遂げた今を基点に、将来に向けて農村が個性的で健全な姿を維持できるかどうかが重要である。その判断には人口の絶対値よりも住民の世代構成を見る方法が使われる。その地域に見合った人口構造を維持しているかどうかである。近年、動植物など生態系の持続性を判定する際にもこの考え方が用いられている。しかし、人間社会では地縁血縁のほかに個人的事情によるUJエターソンなどの社会的要因が作用したり、地域機能を保とうとして人口調節作用が働くなど、人口動態のメカニズムは複雑である。ともかく、都市に吸収された村が伝統ある個性を發揮し続ける必要不可欠な規定要素は何かに思いが及ぶ。

このように、農村はそれぞれ社会、経済、自然環境の面から統計上の数値指標を持つものの、活力度をそれらの絶対値のみで量るわけにはいかない。中でも社会、経済的にはこれ以下では無理と言ついく閾値いが存在するが、自然環境に関しては数値指標の信頼性が落ちる。

それは人の内面と強くかかわってくるからである。即ち、自然環境に対しては個人の多様な価値観が強く効いてくることによる。

ある本に「泥棒も山形では落ち着いて暮らせる」とあった。これは山形県の県民性の一側面なのだろうか。今年の山形農業のトピックであったサクランボ盗難が思い浮かぶ。無防備な農作物を獲物にするとは盗人の美学も地に落ちたと言えるが、それよりもむしろ被害者の寛容さにメディアを通していささか感動した。心までは盗まなかったのである。農村社会が経済性のみでは成り立たないことをうかがわせた。農業や農村の多面性の中に求心力があるのではないだろうか。

当研究所では農村の多面的機能を見出だして、積極的に地域の環境保全に生かすべく研究に取り組んできた。一例であるが、農村の景観整備を軸に取り組んだ地域おこしの山形県と他県との比較がある。一般に、地域の景観は公共財という理由で住民などの内発的な課題解決のための働きかけは起きず、ましてや公の場へ課題を持ち出す手順には進みにくい。山形県の事例はスタートから町役場主導で、他県の事例は町役場と住民グループとで取り組んだ。結果は双方とも他の手本となる成果を上げたが、それを契機にした地域環境整備などの活動は山形県では著しい展開を見せた。社会、経済、自然環境、住民の総体としての両地域の個性の違いがもたらしたものである。山形には、点きにくいが消えにくい堅灰のような人が多いのである。

経済不況と言われる時代、農村の内発力を重視し、時間をかけて大きな運動に高めることが重要である。住民組織である集落、農協、土地改良区、またNPOなどをテコに運動を展開できれば展望は明るい。その際、市町村や県が必要なとき少しだけ調整役になることが効果的だと思える。